

マレーシアの世界文化遺産を活かした小学・中学社会科の授業実践

前在マレーシア日本国大使館付属ジョホール日本人学校 教諭
北海道富良野市立富良野西中学校 教諭 藪内 充裕

キーワード：マレーシア、世界文化遺産、小学校の歴史授業、中学校の歴史の授業

1. はじめに

私が3年間勤務したジョホール日本人学校は、全校児童生徒が約90名の小中併設校である。年上が年下の面倒をよく見てくれる、とても和やかな雰囲気のある学校である。保護者の異動により、1年に半分以上の児童生徒が入れ替わってしまうが、子どもたちは誰とでも仲良くすることができ、楽しく学校生活を送っている。私にとってジョホールでの生活とジョホール日本人学校で過ごした時間は、かけがえのないものであった。そこで、これから在外教育施設派遣教諭を志す教員やマレーシアでお世話になった方々のために、この地で過ごした3年間の教育実践を紹介したい。

2. ジョホール日本人学校の子どもたちについて

ジョホール日本人学校の子どもたちは、絶妙な距離感で人間関係を構築している。それは、互いを尊重しながら自己主張もできる関係である。しかも自然とそのような関係をつくっている。このことに疑問を持った私は、1つの仮説を立てた。

「ジョホール日本人学校の子どもたちは、マレーシアの国民性と文化に影響を受けているのではないか」

マレーシアは多民族国家であり、人口3000万人のうち、マレー系民族が約67%、中国系が約25%、インド系が約7%で構成されている。様々な民族が混在しているが、互いの考え方や文化を尊重しているので、社会の秩序と調和が保たれている。現地の言葉もわからない、私のような日本人にも常に笑顔で親切にしてくれる。日本人学校の子どもたちは、マレーシアの人々が自然にできる「互いの考え方や文化を尊重する」ことができているのではないかと…。それに気づいたとき、マレーシアの歴史や文化についてもっと知りたいと思った。そして、限られた時間で私の探求心を満足させるものは何かと考えたとき、マレーシアにある世界遺産を通して学ぶことであった。

3. マレーシアの世界遺産について

マレーシアには世界文化遺産が2カ所（マラッカ・ペナン島ジョージタウンのマラッカ海峡歴史都市群、レンゴン溪谷の考古遺跡）、世界自然遺産が2カ所（キナバル国立公園、グヌン・ムル国立公園）、計4カ所の世界遺産が存在している。私が授業実践に活用したものは、世界文化遺産であるマラッカ・ペナン島ジョージタウンのマラッカ海峡歴史都市群である。マラッカは、マラッカ海峡の重要な東西貿易の交易点として500年以上に渡り繁栄を繰り返した都市であり、マラッカ海峡を通るアジア・ヨーロッパの国々の文化が、マラッカの街に大きな影響を与えたと考えられる。また、ペナン島ジョージタウンは主にイギリス植民地時代の建物と、様々な文化が融合した独特の町並みを今なお残している。いずれもヨーロッパやアジアの国々の文化、そしてマレーシアの文化が融合している様子を町並みや歴史的建造物から見るができる。

4. ジョホール日本人学校での授業実践について

(1) ジョホール日本人学校の研究テーマ

私がジョホール日本人学校に在籍した1年目の研究テーマが「自ら考え、共に学び合える子どもの育成～小中9年間を見据えた授業づくり～」、2・3年目が「豊かな国際感覚を身に付け、共に学び合う子どもの育成～小中9年間を見据えた授業づくり～」であった。この研究テーマに沿って私は、“生徒一人ひとりが、自分の考えをみんなに伝えながら学習できること”“マレーシアならではの現地素材を積極的に授業に取り入れること”“小中学校9年間の指導内容を踏まえた系統的な指導”を意識して、自らの授業実践に努めた。

私が在籍していた3年間で小学3年生から6年生の社会科と、中学社会科の授業をすることができた。中学校教諭の経験しかなかった私にとって、小学校社会科の授業を担当できたことは、非常に大きな財産となった。

(2) はじめて担当した小学校社会科の授業

私が小学校の社会科の授業を実践してみて、気づいたことが3つある。それは、小学校教諭の方にとっては当たり前前のことかもしれないが、私にとっては新しい発見であった。

「小学校3・4年生は校外学習の機会に恵まれている」

「学年が上がるにつれて、学習内容が自分に身近なところからどんどん広がっていく」

「小学校社会科の学習内容を深化させたものが中学校の社会科の学習内容である」

特に「小学校社会科の学習内容を深化させたものが中学校の社会科の学習内容である」は、中学校社会科の授業内容をスリム化し、そこで生み出された時間を発展的な学習や振り返りの学習に振り分けることができた。

(3) マレーシアの世界文化遺産を利用した授業実践

① マラッカのスルタンパレスと高床倉庫

小学校3年生の社会科で「のこしたいもの つたえたいもの」という学習単元がある。日本では、児童の祖父母の家に行き、洗濯板や黒電話など、数十年前に使用していた道具を見たり、地域にある資料館を訪問したりすることができるが、異国の地で生活している者にとって、そのようなことは困難である。

そこで、視点を日本ではなくマレーシアに置き換えてみた。マレーシアの家の作りは、古い家ほど高床式になっている。都市部は、高層マンションや日本と変わらない造りの家が建ち並んでいるが、そこから離れていくと昔ならではの家が見えてくる。

高床式の家が使われていた時期と利用していた人物の目安をはっきりさせるために15世紀に建てられたスルタンパレス（王様の宮殿）を資料とし、「なぜマレーシアにある昔の家には足がついていたのか」という学習課題を提示した。すると、ほとんどの児童は condominium という高層マンションで生活しており、住んでいる場所が高いほど涼しいという概念をもっているのので、すぐに学習課題に迫ることができた。私が現在生活している北海道の子どもたちには、この概念は乏しいと思う。熱帯地域に生活している子どもたちだからこそ自らの経験とマレーシアの地理的条件を学習内容に照らし合わせて考えることができたのではないか。

この学習を通して、私たちの祖先は、生活がより豊かで快適になるよう様々な工夫をしており、その工夫が今でも残っていることを小3の児童は実感できた。



マラッカにあるスルタンパレス



弥生時代の遺跡に見られる高床倉庫

また、小6、中1の歴史の授業でもスルタンパレスと高床倉庫の画像資料を提示し、“なぜ、高床倉庫には足がついているのか”を考えさせた。小6、中1になると、小3の児童と同じように、倉庫に足をつけることで、風通しがよくなり、食料保存に適していると考えただけではなく、スコールによる洪水を経験していることから、浸水による被害を防ぐためであると考えられることもできた。

日本の弥生時代に使われていた高床倉庫とマラッカのスルタンパレスに隠された共通点を見つける授業は、マレーシアならではの素材を取り入れたので、ジョホール日本人学校の子どもたちに大変好評であった。

②来日前にザビエルが滞在していた国はマレーシア！

日本人にとってなじみのある歴史上の人物に「フランシスコ・ザビエル」がいる。しかし、1549年、鹿児島においてザビエルがキリスト教を布教したのは有名であるが、ザビエルが日本に来る前は、マラッカにいたことを知っている子どもたちは数少ない。ザビエルは、マラッカで旧薩摩藩の武士であった「ヤジロウ」という人物に出会い、それがきっかけで、キリスト教を日本で布教しようと考えた。ヤジロウとザビエルの出会いを知ると、ザビエルが、日本で布教する場所を選ぶのは、ヤジロウの故郷である薩摩（鹿児島県）であると中学生であれば予想ができる。

ジョホール日本人学校の子どもたちは、日本とマレーシアの歴史について、意外なところで結びついていたことに驚いていた。

5. さいごに…

社会科の授業だけではなく、道徳や総合的な学習にも活かせないかと考えてみた。できれば、道徳教育の指導要領にある内容「4 主として集団や社会とのかかわりに関すること」にうまく活用したい。

世界に目を向けると、地域によっては、人種や宗教の違いから様々な対立が起こっているところがある。マレーシアは多民族国家であり、イスラム教徒、ヒンドゥー教徒、仏教徒をはじめとする信者がいるが、現在のところ、戦争になるような大きな争いはない。では、いつから仏教を信仰する中華系の人々や、ヒンドゥー教を信仰するインド系の人々がマレーシアに移り住んだのか。それは、イギリスがマレーシアにある豊富な資源を活かし、経済の発展を図ろうと、中国の一部やインドから強制的に労働者として連行し、マレーシアで働かせたことが始まりである。偏った見方かもしれないが、イギリスがマラッカを占領した1795年から日本がマレーシアを植民地支配する1941年までの約140年間、マレーシアはイギリスの支配下であり、マレー系、中華系、インド系の民族は、イギリスに支配されている同じ民族であったといえる。人種はちがうが、イギリス人による支配下にあることは変わらない。時には、互いが協力し、様々な困難を乗り越えてきたのかもしれない。長く苦しい植民地支配の時代を乗り越えるためには、3つの異なる民族が互いの文化を認め合い、共存していかなければならない。もしかすると、この時期から、お互いの価値観や文化、宗教観を受け入れ、共存共栄を図っていこうとする土台が生まれたのかもしれない。

では、違う文化を持つ人々が、互いの良さを認め、上手に生活する具体的な方法は何であろう。これを道徳の時間に子どもたちに考えさせたい。言葉が通じない、信教がちがう、肌の色もちがう…そんな人々が仲良く生活するためには何が必要なのか。意外にもその具体的な方法を子どもたちは知っている。また、知らず知らずのうちにできている。その答えが見つかったときに、ふだんから実践されている「あいさつ」の大切さに気づくことができる。あいさつをしなければいけないという考え方から、あいさつは人の気持ちを幸せにすることができる1つの手段であることに気づかせたい。私がマレーシアで生活をしていて、人と人との関わりの中で大切なことは、「笑顔」で接することだと学んだ。マレーシアに住んでいる人々は、人種はちがっても「笑顔」であいさつを交わしている。現地の人たちとコミュニケーションをとる際は、英語を用いることが多いのだが、英語は、日本人も含めマレーシアで生活をしている人たちの母国語ではないので、正しい英会話は殆ど成り立たない。ましてや、私のように英語もままならない者は、知っている英単語をやみくもに並べていくだけである。それでも、

マレーシアの人々は一生懸命理解しようと聞いてくれる。だからこちらも一生懸命伝えようとする。どんな会話でも必ず「あいさつ」からスタートする。そのあいさつが笑顔で、相手にあたえる印象がよければ、より友好的な人間関係が築けると気づいた。大人が笑顔で生活しているので、当然子どもたちもすばらしい笑顔で接してくれる。

帰国後の私の使命として、将来、子どもたちが活躍する場は、日本だけでなく、世界中にあることを伝えたい。そして、自分の知らない世界に、興味関心を抱き、自分の足で現地に赴き、見て、聞いて、直接肌で感じてみようとする生徒、さらに物事を深く追求することを楽しいと感じる生徒に育てたい。

私見であるが、日本国民は、周りの人たちと同じことをしていないと不安になってしまう人が多いような気がする。それは、島国という環境、他国からの侵略を命がけで防いでくれた先人達の財産など様々な要素が含まれていると思っている。そんな私たち日本人が、マレーシアの人々が持っている“違って当たり前”“互いの価値観や文化を受け入れる”考え方を取り入れていくことで、世界で活躍できる日本人の育成につながっていくのではないか。そのような生徒を一人でも多く育てるために、これからの日本での教育活動に励んでいく所存である。